

## 鶴見岳・伽藍岳の火山活動解説資料(平成30年1月)

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。  
噴火予報(噴火警戒レベル1、活火山であることに留意)の予報事項に変更はありません。

### 活動概況

- ・噴気など表面現象の状況(図1、図2 - )  
大分県監視カメラによる観測では、噴気は認められませんでした(2017年12月:100m)。
- ・地震や微動の発生状況(図2 - 、図3)  
火山性地震の月回数は3回(2017年12月:5回)と少ない状態でした。このうち震源が求まった火山性地震は1回で、伽藍岳の南側約1.5kmの深さ4km付近でした。  
火山性微動は2010年11月の観測開始以降、観測されていません。
- ・地殻変動の状況(図4、図5)  
GNSS<sup>1)</sup>連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。



図1 鶴見岳・伽藍岳 噴気の状況(大分県監視カメラによる)  
<1月の状況>  
大分県監視カメラによる観測では、噴気は認められませんでした。

1) GNSS(Global Navigation Satellite Systems)とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ(<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>)や気象庁ホームページ([http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php))でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料(平成30年2月分)は平成30年3月8日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び大分県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ(標高)』を使用しています(承認番号:平29情使、第798号)。

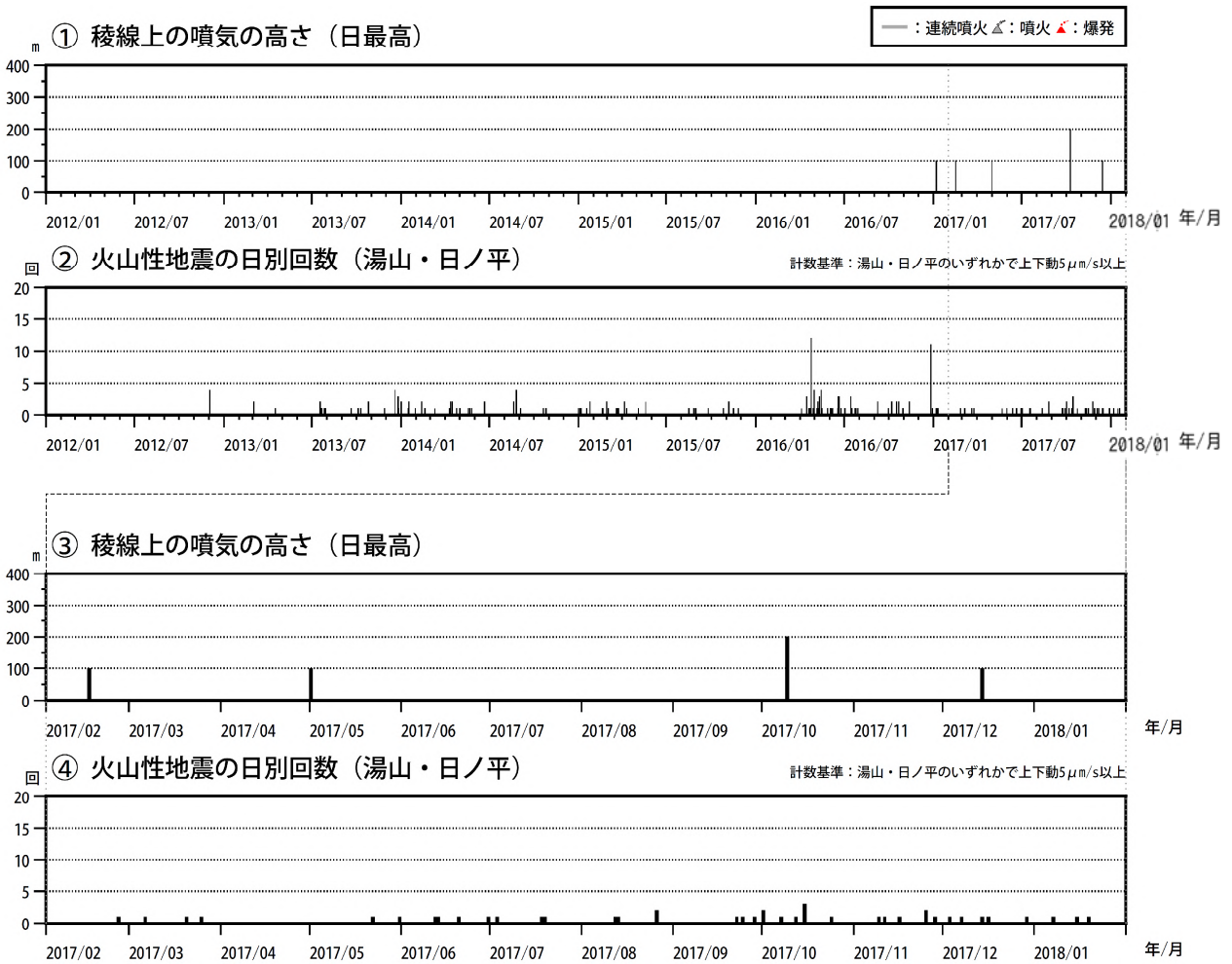


図2 鶴見岳・伽藍岳 火山活動経過図(2012年1月~2018年1月)

< 1月の状況 >

- ・噴気は認められませんでした(2017年12月:100m)。
- ・火山性地震の月回数は3回(2017年12月:5回)と少ない状態でした。
- ・火山性微動は2010年11月の観測開始以降、観測されていません。

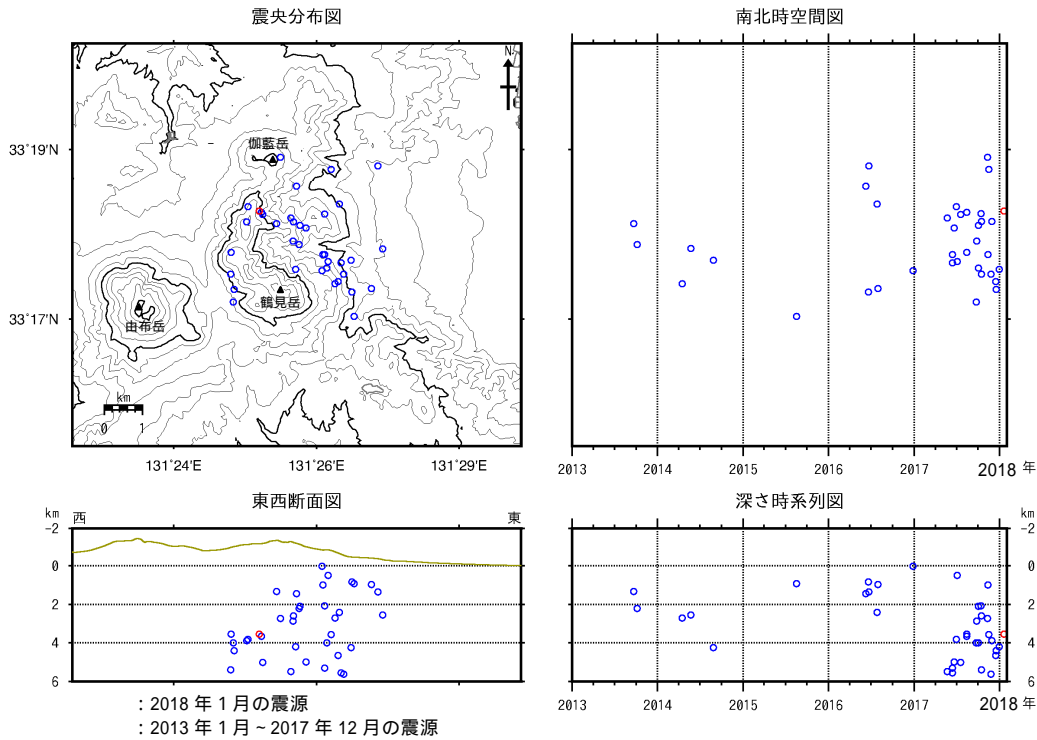


図3 鶴見岳・伽藍岳 震源分布図（2013年1月～2018年1月）

< 1月の状況 >

震源は、伽藍岳の南側約1.5kmの深さ4km付近でした（東西断面図）。

2017年8月1日から震源決定方法を変更しています。

2017年3月24日の鶴見岳西山麓観測点の整備により震源決定の精度が向上したことから、鶴見岳・伽藍岳直下の深さ5km前後までの震源を求めるようにしています。

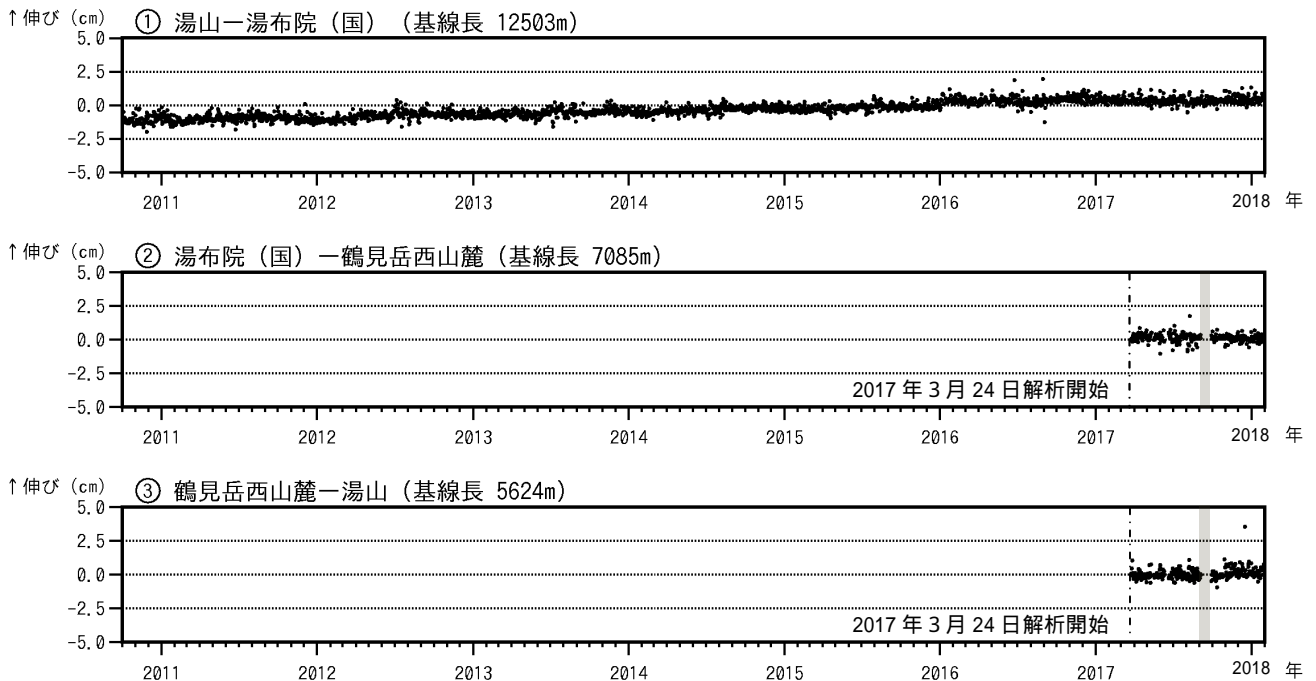


図4 鶴見岳・伽藍岳 GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月～2018年1月）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。

この基線は図5の ~ に対応しています。

灰色部分は観測点障害による欠測を表しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年(2016年)熊本地震の影響による変動が大きかったため、この地震に伴うステップを補正しています。

(国)：国土地理院

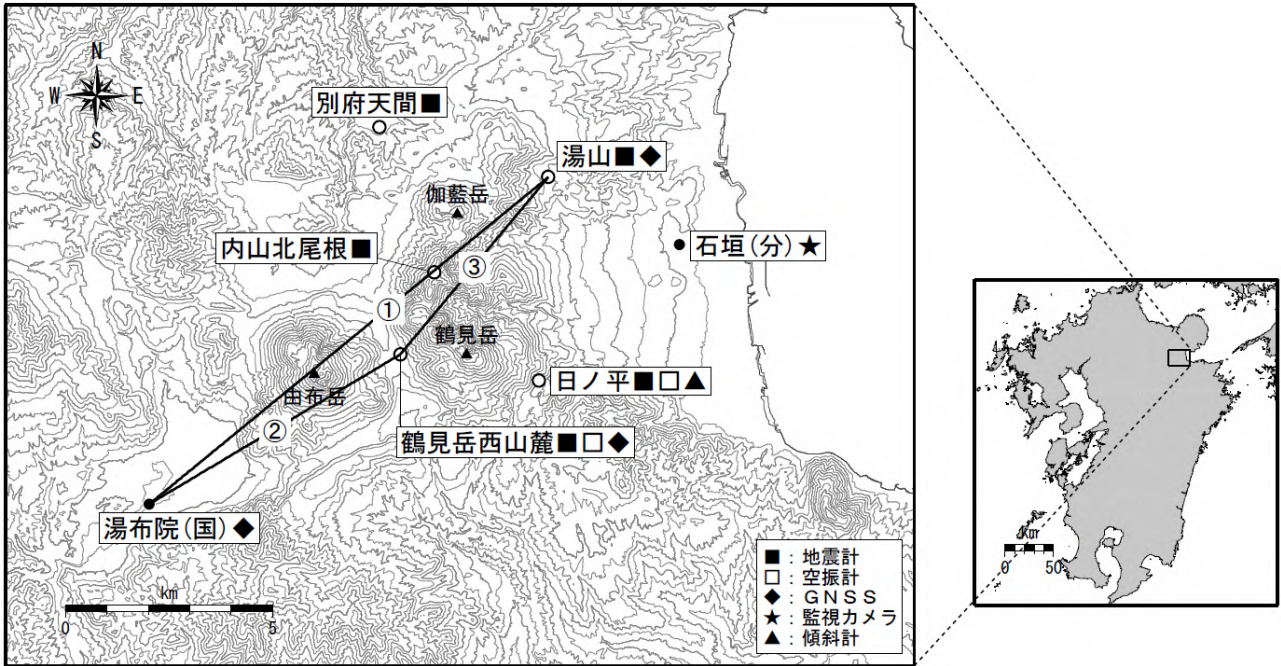


図5 鶴見岳・伽藍岳 観測点配置図とGNSS連続観測による基線番号

小さな白丸( )は気象庁、小さな黒丸( )は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
 (国)：国土地理院、(分)：大分県  
 「石垣(分)」は大分県監視カメラを示しています。